

ハリー・ポッターのイギリス (2)

—『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における
階級問題と政治

坂 田 薫 子

はじめに

「ハリー・ポッターのイギリス (1)」で紹介したように、2007年に児童文学、ファンタジー小説『ハリー・ポッター』シリーズ¹を完結させた後、J・K・ローリング (J. K. Rowling) が初めて大人向けの読み物として著した小説²、『カジュアル・バイカンシー——突然の空席』 (*The Casual Vacancy*, 2012) の本カバーの後袖によると、全七巻からなる『ハリー・ポッター』シリーズは、2012年の時点で、「全世界で四億五千万冊以上を売り上げ、二百以上の国々、地域に流通し、七十三カ国語に翻訳され、映画は八本制作され、すべて大ヒットを記録している」世界的なベスト・セラーとなっている。

『ハリー・ポッター』がローリングの本国イギリスのみでなく、世界のあちこちで、子どもから大人まで、幅広い年齢層の人々に愛読され、世界的な社会現象となった背景には、これまでに時代や国を超えてベスト・セラーとなった他の児童文学、ファンタジー小説同様、多くの読者がこのシリーズに、子どもが大人へと成長するために直面する通過儀礼とその経験のもたらす葛藤、家族愛、人類愛など、国や地域、言語、性別、年齢を超えて、多くの人々が共有している感情や思想、問題意識を読み取っているからに違いない。ヴォルデモート (Lord Voldemort) にドイツ・ナチスのヒットラーとの類似を見出す読者がいたり、魔法省 (Ministry of Magic) が次々と

打ち出す政策の中に9.11以降の西欧諸国のテロ対策との類似を見出す読者がいたり、確かに、『ハリー・ポッター』シリーズには時代や国境を超えた世界の宗教問題、政治問題のもたらす影響の数々を読み取ることが可能である。

しかし、その一方で、物語の終盤、「第二次魔法大戦」(The Second Wizarding War、別名「hogwartsの戦い」(The Battle of Hogwarts))に集結するのはイギリスの魔法使いのみで、この小説が描いているのは国や地域を超えた広い世界というよりもむしろ、作者の本国イギリスという限られた世界であるということもまた否定できない事実である。ローリングが『ハリー・ポッター』シリーズに描き出そうとした世界とは、彼女の生きる現代イギリスという特定の社会でもあるのだ。

そこで、論文「ハリー・ポッターのイギリス」では、世界的ベスト・セラー『ハリー・ポッター』シリーズに読み取ることのできる、現代のイギリス社会が抱える諸問題と、それらに対する作者ローリングの態度、回答について考察することを試みている。前論文「ハリー・ポッターのイギリス(1)」では、主人公ハリー・ポッター(Harry Potter)が十代を生きる魔法界という仮想の世界に読み取ることのできる人種問題について分析し、作者ローリングが人種問題をどのようにとらえていたのかについて考察した。今回の論文「ハリー・ポッターのイギリス(2)」では、このシリーズでは階級はどのように表象されているのか、そしてそこに作者ローリングのどのような社会観、政治観を読み取ることができるかを考察してみることとする。

1. 『ハリー・ポッター』と階級

1.1. 階級闘争

マルフォイ(Malfoy)家の人々は、他者と自分を区別することで、自分の優位性を保とうとしているが、彼らは、「ハリー・ポッターのイギリス

(1)」で論じたように、人種差別を暗示する「マグル (Muggle) 生まれ」(と「半純血」(half-blood))への差別を行うだけではなく、同じ「純血」(pure-blood)の魔法族のウィーズリー (Weasley) 家をも差別の対象にしている。後者の差別意識をもたらしているのは、人種主義ではなく、おそらく階級主義であると考えられる。ウィルトシャーにある(『不死鳥の騎士団』342)田園のカントリーハウス、マルフォイ・マナー (Malfoy Manor) (『死の秘宝』の第一章と第二十三章)に住み、ハウス・エルフ (house-elf) を使用人として所有し³、一族の肖像画を飾り(『死の秘宝』503)、「コネ」(“influence”『アズカバンの囚人』137、『不死鳥の騎士団』399)による強大な影響力を行使する(『不死鳥の騎士団』174-175, 399, 778)マルフォイ家は、イギリス社会における上流階級を表象しているように思われる。そのマルフォイ家と婚姻関係で結ばれているブラック (Black) 家も一族の肖像画と家系図を壁に飾り、ハウス・エルフを使用人とし、自分たちの狭いサークルの外にいる家に嫁いだ者をその家系図から抹消している(『不死鳥の騎士団』の第六章)。その様子は古くから続く英国貴族の誇りを感じさせる。上流階級にとって、階級というものは、生まれだけで保たれていくものではなく、そこには富も伴われなければならない。そして、その富がどのようにもたらされたかが重要視される。彼らの財産は、労働によってもたらされるものであってはならず、先祖代々の土地家屋の所有からもたらされるべきであると考えられている。同じ「純血」の魔法族でありながら、貧しいウィーズリー家は(魔法使いであるため、いわゆる肉体労働には従事していないが)アーサー・ウィーズリー (Arthur Weasley) の日々の役所勤めから得られる報酬で生計を立てている。マルフォイ家がウィーズリー家を差別の対象と見なすとき、マルフォイ家が重んじているものとは、特権階級としての、貴族を含む、上流階級の階級意識なのである。

ローリングがチャリティ・オークションのために描いたブラック家の家系図⁴を見ると、その中にはヴォルデモートに与した「死喰い人」(Death Eaters) たちのみでなく、彼らと真っ向から対立したポッター家、ウィーズ

リー家、そして現在はアーサー・ウィーズリー夫人となっているモリー・プレウィット (Molly Prewett) の家系であるプレウィット家、さらにはハリーに代わって「選ばれし者」(“the chosen one”) になる可能性のあったネヴィル (Neville Longbottom) の家系であるロングボトム家まで、様々な魔法族が婚姻関係によって複雑に絡み合っていることが分かる。婚姻関係によって複雑に絡み合ったこのような家系図を見ていると、まるで歴史の教科書に出てくるイギリス王室やイギリス貴族の家系図を見ているような錯覚にとらわれる。魔法界に君主は存在せず、称号を与えられた者もないが、「純血」の一族を記載した魔法界の『生粋の貴族——魔法界家系図』(*Nature's Nobility: A Wizarding Genealogy*) (『不死鳥の騎士団』133、『死の秘宝』213, 471–472) という年鑑は、現実のマグル界の貴族年鑑に相当するものとしてとらえられる。ヴォルデモートの祖父にあたり、「純血」主義のマールヴォロ・ゴント (Marvolo Gaunt) が、「純血」であることは「王室の血を引く」(“royal”『死の秘宝』473) ことを意味すると考えていたことは示唆的である。

さらには、最終巻において、アルバス・ダンブルドア (Albus Dumbledore) が著し、ハーマイオニ・グレンジャー (Hermione Granger) に渡した『吟遊詩人ビードルの物語』(*The Tales of Beedle the Bard*) の中の「三人の兄弟の物語」(“The Tale of the Three Brothers”) が明らかにしたように(『死の秘宝』の第二十一章)、魔法族の家系図の頂点には、ペヴェレル (Peverell) 家の三兄弟が存在している。ヴォルデモートの母の家系はペヴェレル家の次男カドマス (Cadmus) の血を引くゴント家であり、ハリーの父ジェイムズ・ポッター (James Potter) の家系は、ペヴェレル家の三男イグノタス (Ignotus) の血を引いている。ヴォルデモートもハリーも、ペヴェレル家の家系であり、魔法界における権力の象徴である三つの秘宝を手に入れようと画策する。ハリーとヴォルデモートとの間の戦いは、自分がペヴェレル家の正当な後継者であることを証明するための戦いとも解釈でき、『ハリー・ポッター』シリーズで繰り返される様々なレベルでの対立は、王

権を巡る貴族間の権力争い、あるいは下克上を妨げようとする階級闘争として読み解く可能性を示唆している。

1.2. 中産階級の台頭——特権としての魔力

以上のことを踏まえて、『ハリー・ポッター』シリーズで繰り上げられる対立を階級闘争としてとらえたとき、「純血」のドラコ・マルフォイ (Draco Malfoy) が「マグル生まれ」のハーマイオニに覚える嫌悪感、出自という家系図に基づいた優位性を、「メリトクラシー」(実力主義、能力主義⁵)によって脅かそうとする中産階級に対する上流階級の恐怖感と見なすことが可能になる。事実、『秘密の部屋』でドラコは、ハーマイオニのことを「あの成り上がりの (“jumped-up”) マグル生まれのグレンジャー」(242、強調は筆者によるもの)とののしっている。また、ヴォルデモートがマグルのことを「平民」(“commoners”『炎のゴブレット』702)と呼んでいることも、「純血」とマグルの表象するものを示唆している。

魔法族にとって、魔力は自分たちの特権であり、自由に魔法を駆使できることがステータス・シンボルである。彼らの主張に従えば、本来魔法族を両親に生まれてきた者だけが魔力を持つことができるのであって、マグルを両親に生まれてくれば、その特権は手にすることができないはずである。『死の秘宝』では、この理論に基づいて、魔力を持つマグルは、魔法という「知識」(“knowledge,” 21)を何らかの「不正な方法で」(“illegally,” 234)魔法族から「盗んだ」(“theft,” 233; “stolen,” 234; “steal,” 234)「泥棒」(“thieves,” 21; “usurpers,” 233)であると見なされ、「マグル生まれ」狩りが行われることになる。また、両親が魔法族であるにもかかわらず、魔力を持たぬ者は、「スクウィブ」(Squib)と呼ばれ、一族の恥として忌み嫌われ、場合によってはブラック家のように、一族の家系図から抹消されてしまう⁶。ところが、実際には、魔法族の主張に反して、才能さえあれば、本人の努力次第で、マグルでも魔力を身につけ、魔法界に入ることができるのである。『秘密の部屋』において、父親のお金でスリザリン (Slytherin) 寮の「ク

イディッチ」(Quidditch)・チームのメンバーに選ばれたドラコに対するハーマイオニの皮肉が象徴的である——「グリフィンドール (Gryffindor) 寮では、誰もお金でクイディッチ・チームのメンバーになれた人はいないわ。彼らは純粋に実力でメンバーの座を勝ち取ったのよ」(123、強調は原典によるもの)。

これを産業革命後の現実の十九世紀ヴィクトリア朝社会と比較してみよう。当時、産業革命によって発展を遂げた資本主義に後押しされ、新興階級である中産階級の人々は、落ちぶれた貴族たちからカントリーハウスを買い上げ、選挙法改正によって政治に口を挟むようになっていた。そうした状況の中、当然上流階級の人々は新興階級の台頭に脅威を覚えていた。自らの努力でhogwarts魔法魔術学校 (Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry) への入学許可を得、人一倍の努力で常に学年トップを維持するハーマイオニにドラコが感じる脅威 (と、マルフォイ氏が覚える嫌悪感) (『秘密の部屋』60) は、当時のイギリス貴族たちが覚えていた焦燥感と同じところに根ざしているように思われる。「純血」対「マグル生まれ」という構図は、上流階級対中産階級という階級闘争としても読み解くことが可能なのである⁷⁾。

1.3. 新上流階級の形成——富としての魔法

もちろん、称号を持たぬ「純血」の魔法族は、厳密な意味では貴族ではないため、王族、貴族、ジェントリーによって構成されていた十九世紀の旧上流階級 (old upper class) には当てはまらないとしても、現在のイギリスにおける新上流階級 (new upper class) の定義にはぴったりと当てはまる。社会学の定義によると、現在のイギリスの上流階級は、十九世紀の旧上流階級に、ビジネスで財を成した新しい階級が加わることによって成り立っている。現代の新上流階級の中心はもはや貴族ではなく、資本家階級 (capitalist class) となっている。ロバーツ (Ken Roberts) によると、この新上流階級の中心メンバーである資本家階級とは超富裕層の個々人たちで、

「自分たちの個人財産を所有し、それを何世代にもわたって譲っていく能力を持っているために、一つの階級として見なされ得る人口統計学上の基準を満たしている」(16)。彼らは「お互いが密接に結び付いた階級で、階級としての極めて重要な利益を理解しており、自分たちの利益を守る必要が生じると、一致団結して行動することができる」(16) 集団である。彼らの階級としてのこの特徴は、「マグル生まれ」に自分たちの特権を脅かされそうになったときの「純血」たちの団結力を説明してくれる。また、「純血」が現代の新上流階級を表象しているとすれば、魔法とは「富」であり、文字通り、富を持たないウィーズリー家は同じ「純血」の魔法族から差別の対象とされる。そして、比喩的な意味で「富」を表象する魔法を親から受け継ぐことができなかつたスクイブもまた、差別の対象となるのである。

実は、「純血」の不安はおそらく、彼らが旧上流階級の貴族ではなく、資本主義の富が生んだ新上流階級に過ぎないことにこそ帰することができる。現代の新上流階級が覚えている危機感とは、上流階級である自分たち(オーナー)と、中産階級であるマネージャーの間の境界にフェンスがない(Roberts 174) ために生じている。富とは遺伝ではなく、単なる個人資産に過ぎない以上、現代の新上流階級を脅かすのは中産階級の「メリトクラシー」の概念なのである。それゆえに、上流階級は自分たちの生き残りのために、自分たちの集団に誰か新しいメンバーが入ってくることに對して細心の注意を払わねばならない(Roberts 158)。そうした彼らが示す露骨な階級差別こそが、「富」を表象する魔法を実力で勝ち取ってきた「マグル生まれ」の代表であるハーマイオニへの差別に読み取ることができるようになっていく。現代において、階級間の対立というのは、かつてマルクスが主張したようにオーナーと労働者の間ではなく、オーナーとマネージャーの間に生じている(Roberts 172) のだから、魔法界の排他主義は、「純血」と「マグル生まれ」の間の対立を、新上流階級と中産階級の階級闘争と見なすことを可能にしてくれる。

ロバーツ(153-154)によると、ここ三十年の傾向として、中産階級の

人々、それも特に親の代から中産階級に所属していて、労働者階級からの成り上がりではない人々、そして高等教育を受けている人々は、達成できたからといって自分たち中産階級に特に利益があるわけではない問題、例えば、平和、人種問題、男女の平等、ゲイの権利、亡命者の権利、動物擁護、環境問題などへの関心が非常に高いという。これはまさにハーマイオニがハウス・エルフのために立ち上げた「屋敷しもべ妖精福祉振興協会」(the Society for the Promotion of Elfish Welfare、通称 S.P.E.W.) 設立の背景を説明するものである。彼女のハウス・エルフへの興味は、彼女の中産階級出身を強調するものとして読むことができるのだ。

1.4. ローリングの意図

ではここで、ハーマイオニの「屋敷しもべ妖精福祉振興協会」の扱われ方に、差別意識に対するローリングの考え方を読み取ってみよう。魔法界では魔法ではほぼすべてが果たし得るので、人間の召使いは必要ではなく、農業労働者や工場労働者もいない以上、ここにはいわゆるプロレタリア階級(無産者階級)は存在し得ないことになる。そのため、労働者階級を象徴する存在は他の魔法種族となり、『ハリー・ポッター』シリーズではハウス・エルフがその表象を担っている⁸。女性であるがゆえの性差別に遭い、「マグル生まれ」であるがゆえの人種差別と階級差別に遭うハーマイオニには弱者の気持ちが最も理解できるということなのだろうか、彼女はドビー(Dobby)たちハウス・エルフのために、「屋敷しもべ妖精福祉振興協会」を立ち上げた。しかし、残念ながら、ヴォルデモートとの大戦争を前に、差別根絶のための彼女の運動は途中から触れられることがなくなったまま、この小説は幕を閉じてしまう。この小説の人種問題や階級問題を論じる研究者たちの中には、そこに作者ローリングの限界を指摘し、批判する者もいる(Dendle 165, 174)。しかし、ハーマイオニの運動が立ち消えになってしまうのは、より重要な大義に道を譲ったということだけではないように思われる。差別の存在を明らかにすることは比較的たやすいが、そうし

た差別を克服するための解決策を提示することはいかに困難であるかを、アムネスティ・インターナショナルで働いた経験があり、また、シングルマザーとして生活保護を受けて生活していたという過去を持つローリングは十分に理解しており、あえて問題提起のみにとどめ、その先を示そうとはしなかったのではないだろうか。

おそらく、有効な解決策を見出すことよりもむしろ、ローリングが重要視していたのは、自分たちの中にある差別意識を自覚できていない態度を是正することであったようだ。作品のヒーロー、ハリーもその友人のロン・ウィーズリー (Ron Weasley) も、ハーマイオニ同様、差別される側に立っていながら、自らの中に存在している差別意識を自覚していない。それに気付いているハーマイオニの苛立ちこそがローリングの描きたかったものだったのだろう。例えば『謎のプリンス』で、ハリーはスラッグホーン (Horace Slughorn) がハウス・エルフにお酒の毒味をさせていると聞いて、それは「虐待」(“abuse,” 574) だと考えているが、自分がドラコの二十四時間の素行調査をクリーチャー (Kreacher) とドビーに命じたために、ドビーが一睡もできないでいることには何の良心の呵責も覚えていない(535)。さらには、最終巻『死の秘宝』で、ヴォルデモートとの死闘を終えたハリーは、たとえレベルは違っても、同じようにこの大戦争に参加し、死闘を繰り広げたクリーチャーが、自分のために食事を用意してくれることを期待している(821)。ハリーの期待感には、召使いなら、どんなに疲れていようとも、疲れた主人のために尽くして当然であるという考え方が、無意識のうちに存在しているのである。ドビーの解放には手を貸したハリーだったが、遂に最後までクリーチャーを解放することはない。ウィーズリー夫人でさえ、忙しさの喩えとしての発言だとしても、アイロンがけをしてくれるハウス・エルフがいてくれたらいいのに、と口にしたり(『秘密の部屋』36)、「不死鳥の騎士団」(the Order of the Phoenix)の本部となったブラック邸の汚れ方を見た際、ブラック家のハウス・エルフであるクリーチャーの怠慢を嘆いたりしている(『不死鳥の騎士団』117)のだから、人

種差別同様、階級差別も根深いものがあることが伝わってくる。

もちろんローリングも、そして私たち読者も同罪である。ハリーのために死んでいくドビーの最期をお涙頂戴的に美しく描くローリングの描写法は、十九世紀初頭、奴隷制廃止の議論が盛んだった頃に、奴隷制を肯定的に描こうとする作家たちによって数多く描かれた“grateful Negro”の描かれ方に類似するものがある。ドビーの死を美化して描くローリングも、そしてその場面に感動して涙を流す私たち読者もまた、知らず知らずのうちに、身分の差という概念を当然の前提であるかのように受け入れているのである。

2. 『ハリー・ポッター』と政治

2.1. 魔法界の政治体制

古くは、ホグワーツ魔法魔術学校の創始者の一人、サラザール・スリザリン (Salazar Slytherin) の態度が示すように、あるいはゴント家のあり方が示すように、さらにはブラック家の家系図が示すように、ヴォルデモートが登場するずっと以前から、魔法族たちの中には既に選民思想が存在していて、ヴォルデモートの登場を容易にする土壤があったことが分かる。シリーズ内では「マグル生まれ」根絶運動が行われるが、魔法界の人間たちは既に過去に巨人 (giant) 根絶を行っており、現在巨人族はアメリカの先住民族の居留地 (Reservation) のように定められた自治区 (“the giant communities” 『炎のゴブレット』479) に閉じ込められている。もともと魔法界には、他民族、他人種、他種を差別化、差別化する行為を行いやすいシステムが存在していたことがうかがえる。では、ヴォルデモートの台頭を容易にしまった魔法界のあり方とは何なのであろうか。そのことを解き明かすために、『ハリー・ポッター』シリーズに描かれているイギリスの魔法界の政治体制について考察してみよう。

魔法界にはたった一つの省、魔法省しか存在せず、議会が存在しない上、

裁判所(「ウィゼンガモット法廷」(The Wizengamot))も魔法省の一機関となっており、魔法省が司法、立法、行政の三権のすべてを手中に収めている。裁判所だけでなく、警察の役割も魔法省の「魔法法執行部」(Department of Magical Law Enforcement)の中の「魔法警察部隊」(Magical Law Enforcement Squad)が受け持ち、監獄アズカバン(Azkaban)も魔法省の管轄下にある。さらにはhogwarts魔法魔術学校の試験も魔法省の中の「魔法試験局」(Wizard Examinations Authority)が実施、監督し、そこで優秀な成績を取めた卒業生を魔法省に就職させているだけではなく、ドロレス・アンブリッジ(Dolores Umbridge)の介入が明らかにしたように、その教育にも目を光らせている。その上、メディアをコントロールし、言論の自由を規制している(『炎のゴブレット』787、『不死鳥の騎士団』109, 625、『死の秘宝』32)。こうしたことから分かるように、魔法界では権力が一箇所に集中しており、エリート主義、全体主義が生まれやすい土壌が存在している。このように、権力者たちが自分たちに都合のいい世の中を作ることが容易な政治システムになっている魔法界は、当然のことながら、階級主義や人種主義がはびこりやすい環境にある。ファシズム主義者ヴォルデモートの台頭を許してしまったのは、まさにこの魔法界の体制なのである。逆の言い方をすれば、魔法界の体制こそがヴォルデモートという「悪」を生み出してしまったと言える。

省だけではなく、例えば、学校も一つ、病院も一つ、銀行も一つしかなく、魔法界には競争というものがまったく存在していない。民主主義のシステムが完全に欠落している。魔法界では「純血」の一部のエリートが全支配権を握ることが可能な体制になっている。競争がないということは、社会における階級移動(social mobility / class mobility)が存在していないことを意味する。「半純血」である以上、本来そこに入り込むことができなかったはずのヴォルデモートは、このシステムを巧みに利用し、頂点に上ろうとする。もちろん全権力を自分ひとりの手中に収めるファシズム政治を目指したヴォルデモートは、当然最後には滅ぼされる運命にあるが、彼

の存在なくしては、魔法界が是正されることもまた、なかったであろう。魔力においてその右に出る者がいないとされたダンブルドアにも果たし得なかったのであるから、やはり「半純血」で、魔法界のシステムに入り込むことのできなかつたはずのハリーが、一人で魔法界の政治システムを批判したところで、魔法界はびくともしなかつたであろう。未だに階級主義的で、全体主義的な側面が残ってはいるものの、取りあえず「純血」、「半純血」、「マグル生まれ」の共存が保たれたという点では、ある程度民主主義的な変化が魔法界に訪れることになったのは、全体主義が行き着く場所、ファシズム政治を目指した負の存在、ヴォルデモートが、魔法界の「闇」を誰の目にも明らかにし、魔法界の「濃み」を外に出す役割を果たしたからなのである。

2.2. 魔法界と新労働党政権

2.2.1. テロ対策

こうした魔法界の描写は、『ハリー・ポッター』シリーズの出版された1997年から2007年の間に政権に就いていた「新しい」労働党(ニュー・レイバー)(New Labour)政権のテロ対策に対するローリングの批判と見なすことも可能である。2001年9月11日の同時多発テロ事件以来、イギリスでも安全が最重要視されるようになる。セルドン(Anthony Seldon)が編纂した『ブレアのイギリス、1997年から2007年』(*Blair's Britain, 1997-2007*)の第十五章「犯罪と刑罰政策」(“Crime and penal policy”)で、ニューバーンとライナー(Tim Newburn and Robert Reiner 325)は、人々がイギリスが直面している三つの最も重要な問題と考えている項目について長年調査している「市場・世論調査インターナショナル」(Market & Opinion Research International、略称MORI、2005年にIpsos UKに買収され合併し、現在はIpsos MORI)の調査結果を参照し、1970年代初頭は法と秩序が上位を占める割合は10パーセントに満たなかつたのに、1993年からは

犯罪が上位を占める割合は30パーセントを越すようになり、2001年のテロ以降、犯罪は一貫して人々の最大の関心事となり、イギリスは安全に対する異常なまでの強迫観念に囚われていると指摘している。

こうした安全を最重要視する国民の要望に応えるため、イギリス政府は治安を重んじ、取締りを強化していく。前述のニューバーンとライナー(330)によると、1997年から2006年の間に、刑事司法と刑罰政策に関する四十を超える主要な法律が議会により作られたという。彼らは、被疑者に対する保護措置が減じられる一方で、警察の権限が拡大されていった様子を、関連した法律を列挙して明示している(327-328)。1997年には警察法(Police Act 1997)が、1998年には犯罪及び秩序違反法(Crime and Disorder Act 1998)が、2000年には捜査権限規則法(Regulation of Investigatory Powers Act 2000)とテロリズム法(Terrorism Act 2000)が、2001年には刑事司法及び公共秩序法(Criminal Justice and Public Order Act 2001)が制定された。また、2003年の刑事司法法(Criminal Justice Act 2003)は逮捕可能なすべての犯罪について、三十六時間の拘禁を認めた。2005年の重大組織犯罪及び警察法(Serious Organised Crime and Police Act 2005)はすべての犯罪に対する逮捕権限を警察に与え、捜査と指紋採取の権限を強化し、警察職員ではない民間の拘禁職員を認めた。そして、ブレア政権の最後の年2007年には、警察があらゆる者と呼びとめ、尋問する権限を与える案が検討されていたという。こうした精力的な法律整備について、モリス(Nigel Morris)は2006年8月16日付けの『インデペンデント』(*The Independent*)紙の記事「ブレアの『熱狂的な法律作り』——在職中一日一つの新犯罪」(“Blair’s ‘frenzied law making’: a new offence for every day spent in office”)⁹で、「トニー・ブレアが政権に就いている九年の間に、三千以上の新たな犯罪、つまり、ほぼ一日一つずつ新たな犯罪が創造された」とまとめている。

その結果、反社会的行為の摘発数が激増し、テロ容疑者の逮捕、市民権の剥奪など、一部の法的対応はその行き過ぎを指摘されるほどであった¹⁰。

移民や貧困層への差別が著しくなり¹¹、自由や人権の擁護の観点に抵触する恐れのあるテロ対策が許容されるようになっていった。2005年に、ブレア政権がイギリスに「世界に先駆けて秩序優先の監視国家のモデルを作り出」(117)していると指摘し、「オーウェルが小説『1984』の中で描いたような息苦しい社会、安全への全体主義とすら呼びうるような社会がイギリスに徐々に姿を現している」(117)ことへの懸念を表明した日本の行政学研究者山口二郎の負のシナリオが、2007年、作家ローリングによって、児童文学書のなかで、魔法省による全体主義に置き換えられて描写されているように思われる。治安や安全を保障してもらえるのなら、政府の介入を容認するという現実のイギリス社会のあり方が、『死の秘宝』で描写される魔法省による法的な締め付け、「マグル生まれ」へのいわれのない迫害に投影され、作者ローリングの批判の対象となっているのである¹²。

2.2.2. 福祉政策

その一方で、このように、「メリトクラシー」に基づいた社会改革を擁護しているように思われるローリングの姿勢は、新労働党が掲げていた福祉政策を連想させるものがある。ブレア (Tony Blair)、ブラウン (Gordon Brown) による労働党政権は、それまでのサッチャー (Margaret Thatcher)、メージャー (John Major) による保守党政権が次世代に遺してしまった「社会的排除」(social exclusion) という社会問題に対して、政権発足後の1997年8月に早々と「社会的排除対策室」(Social Exclusion Unit) の創設を発表し、「社会的包摂」(social inclusion) という理念で取り組んで見せた。「社会的排除」とは、一言でまとめてしまうと、貧困家庭に生まれ育った者は、十分な教育を受ける機会を奪われているため、仕事に就くことができず、貧困なままであるという悪循環が続くことになり、社会から排除されてしまうという社会問題を指す(山口40-41)。新労働党は、この「社会的排除」を解決するに当たって、福祉によって個人の生活を保障し、すべての人に平等な結果を確保する「完全雇用」(full employment) を実現しようとする

のではなく、雇用の機会の平等を確保する「充分な就労可能性」(full employability)を目指そうとした(山口44)。『ブレアのイギリス、1997年から2007年』の第十九章「平等と社会的公正」(“Equality and social justice”)で、スチュワート(Kitty Stewart 435)は、ブレア政権の取り組みの結果、イギリスは1997年よりも2007年の方が公正でより平等な社会になったと評価する。彼女は、労働党政権の十年間は、「仮に保守党政権があつたと十年間続いていた場合よりも、確実にそして遥かに平等である」(435)と述べている。先ほどは、魔法界の描写に、ローリングによる新労働党政権のテロ対策批判を読み取る可能性を示唆したが、ハーマイオニに、すべての魔法生物を解放し、平等にするという大義を追い求めさせる代わりに、ハウス・エルフが働くための環境を整備するという達成可能なところから組み合わせたローリングの態度には、逆に、新労働党政策との類似を見出すことができるのである。

実は新労働党は、「社会的包摂」の方策の一つとして、出自や環境によって生じる不平等を解消するために、特に教育に重点を置いたことで知られている。上述のスチュワート(426)によると、教育費がGDPに占める割合は、1999年の4.5パーセントという低い数値から、2007/2008年の5.6パーセントへと上昇している。魔法界の存続のために、教育こそが成功の秘訣と考え、「純血」であろうと「マグル生まれ」であろうと、魔力という潜在能力を持って生まれた子どもたちに、平等に(魔法)教育の機会を与えようとするホグワーツ魔法魔術学校の理念は、ローリングの好むと好まざるとにかかわらず、新労働党の教育政策と重なるところが多いのだ。

2.3. ローリングの視点

ローリングはあるインタビュー¹³で、魔法省はハーリー、ロン、ハーマイオニによって改善され、新しいものになったと述べている。しかし、ヴォルデモート亡き後も、魔法界では相変わらず権力が一箇所に集中し、民主主義のシステムは欠如していることだろう。全体主義的な魔法省とは異なる

り、ジェンダー、貧富の差、地位に関係なく入学できるホグワーツ魔法魔術学校は、一見したところ、実現可能な形で民主主義の理想像を担っているように見える。しかし、この場所でさえ、ハウス・エルフの「奴隷制」によって成り立っているという矛盾は、シリーズが幕を閉じた時点で解消されている様子はない。ローリングは別のインタビュー¹⁴で、ハーマイオニがホグワーツ魔法魔術学校卒業後、ハウス・エルフの地位向上に尽力したと答えているが、地位の向上というのが、「奴隷制廃止」(abolition)にまで至ったのかどうかは明らかでない。おそらくローリングの考える理想の社会とは、人種や階級の平等を唱道する社会主義的見解に基づいた社会なのではなく、個々人の実力を重視する自由主義的見解に基礎を置く社会の方であったのかもしれない。

結びにかえて

以上のように、魔法を富のメタファーととらえ、「純血」、「半純血」、「マグル生まれ」という区別に階級問題を読み取る読解法から、政治面を含め、現代イギリスの様々な現実と、それらに対する作者ローリングの思いを垣間見ることができる。ファンタジー小説『ハリー・ポッター』に登場する魔法界は、シリーズが出版された1990年代から2000年代のイギリス社会を振り返ることで、より理解を深めることができる仮想世界なのである。そこで、「ハリー・ポッターのイギリス(3)」では、いかに仮想世界の魔法界が、現実世界のイギリスの置き換えとなっているかを考察する一環として、『ハリー・ポッター』シリーズに読み取ることのできる、現代イギリスのジェンダー観について分析を行う予定である。

注

1 本論文で『ハリー・ポッター』シリーズ全七巻から引用する際には、タイトルの共通部分の「ハリー・ポッター」は省略した上で、翻訳本と映画で使用され、一般化している日本語タイトル、『賢者の石』(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 1997)、『秘密の部屋』(*Harry Potter and the Chamber of Secrets*, 1998)、『アズカバンの囚人』(*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, 1999)、『炎のゴブレット』(*Harry*

Potter and the Goblet of Fire, 2000)、『不死鳥の騎士団』(*Harry Potter and the Order of the Phoenix*, 2003)、『謎のプリンス』(*Harry Potter and the Half-Blood Prince*, 2005)、『死の秘宝』(*Harry Potter and the Deathly Hallows*, 2007)を用い、その頁数を示すこととする。

2 『カジュアル・ベイカンシー——突然の空席』(*The Casual Vacancy*, 2012)の本カバーの前袖には、宣伝文句として「ある小さな町についての大きな物語である『カジュアル・ベイカンシー——突然の空席』はJ・K・ローリングの初めての大人向けの小説。他に類を見ないストーリー・テラーによる作品」(強調は筆者によるもの)と記されている。

3 ジョージ・ウィーズリー (George Weasley) は『秘密の部屋』で、使用人としての「ハウス・エルフというのは、大きな古いマナー・ハウスや城や、そういった場所にいるんだ」(36)と述べ、表象としてのハウス・エルフの役割を示唆している。

4 ローリングは手書きの家系図を2006年1月にブック・エイド・インターナショナル (Book Aid International) に寄贈し、同家系図は2月22日に競売に掛けられた。現在この家系図の写しは、ウェブ・サイト『ハリー・ポッター用語集』(*The Harry Potter Lexicon*)の「高貴で由緒正しいブラック家」(“The Noble and Most Ancient House of Black”)の頁 (<http://www.hp-lexicon.org/images/blackfamilytrees/official-final-version.gif>) などで見ることができる。

また、アーサー・ウィーズリーとモリー・プレウィットの結婚と、彼らの娘のジニー (Ginny Weasley) とハリー・ポッターの結婚によって派生する、言わばブラック家からの分家となるウィーズリー家、プレウィット家、ポッター家だけで作り上げる家系図を描こうとすれば、それだけでも十分に複雑である。

5 ロバーツ (Ken Roberts 150) は、現代の中産階級が最も大切なものと考えている概念の一つとして「メリトクラシー」(実力主義、能力主義)を挙げている。中産階級の人々は地位と報酬は勝ち取るものと信じており、ジェンダー、人種、宗教、社会背景、出身国、国籍などによって差別されることに反対するのが特徴であると指摘している。

6 ちなみにバラット (Bethany Barratt 65) は、魔法界におけるスクウィブの扱いを現実社会の障害者のそれと比較している。

7 ラングワラ (Shama Rangwala) は、ハリーとヴォルデモートの戦いは、「貴族のエリート集団と、主に中産階級と労働者階級による民主主義との間の階級闘争として寓意的に機能している」(132)と述べている。

8 ただしバラット (151) は、ハグリッドを労働者階級出身者として解釈している。

9 『インデペンデント』紙のウェブ・サイト (<http://www.independent.co.uk/news/uk/politics/blairs-frenzied-law-making-a-new-offence-for-every-day-spent-in-office-412072.html>) 参照。

10 『オクスフォード版犯罪学ハンドブック』(*The Oxford Handbook of Criminology*) 第四版に掲載された、モーガンとリーブリング (Rod Morgan and Alison Liebling) の第三十二章「投獄」(“Imprisonment: an expanding scene”)には、1997年の総選挙時

には六万二千人だった囚人の数が、2006年は八万六千三百人（イングランドとウェールズの七万八千人、スコットランドの七千人、北アイルランドの千三百人の合計）に膨れ上がったことが紹介されている（1100）。なお筆者は、この章がオクスフォード大学出版局のウェブ・サイト「オクスフォード大学出版局オンライン・リソース・センター」（Oxford University Press Online Resource Centres）で閲覧可能な期間を利用し、参照した。

11 1997年1月7日付けの『インデペンデント』紙のブラウン（Colin Brown）の記事「ブレア、物乞いの路上からの排除を願う」（“Blair wants beggars off the streets”）（<http://www.independent.co.uk/news/blair-wants-beggars-off-the-streets-1281998.html>）は、貧困者に優しいと一般的には考えられている労働党の党首であるはずのブレア首相が、雑誌『ビッグ・イシュー』（*Big Issue*）とのインタビューで、路上のホームレスの人々に寛容にしないことは正しい行為であると述べたことを一つのニュースとして取り上げている。

12 「死喰い人」を現代社会のテロリスト集団として分析するアメリカ人の研究者バラット（106–115）は、魔法省の政策を、イギリスのブレア政権の政策とではなく、アメリカのブッシュ政権の政策（とそれ以降のテロ対策）と比較して興味深いので参照されたい。

13 2007年7月29日放送のアメリカのNBCテレビの番組『デートラインNBC』（*Dateline NBC*）のインタビュー「ハリー・ポッター——最終章」（“Harry Potter: The final chapter”）より。現在このインタビューのスク립トはNBCのホームページ（<http://www.nbcnews.com/id/20001720/>）などで読むことができる。

14 2007年7月30日に行われたブルームズベリー出版社主催のライブ・ウェブ・チャット（Bloomsbury Live Web Chat）より。現在このウェブ・チャットのスク립トはウェブ・サイト『漏れ鍋』（*The Leaky Cauldron*）（<http://www.the-leaky-cauldron.org/2007/7/30/j-k-rowling-web-chat-transcript>）で読むことができる。

引用文献

- Barratt, Bethany. *The Politics of Harry Potter*. New York: Palgrave Macmillan, 2012.
- Brown, Colin. “Blair wants beggars off the streets.” *The Independent* 7 Jan. 1997. Web. 14 Jan. 2013.
- Dendle, Peter. “Monsters, Creatures, and Pets at Hogwarts: Animal Stewardship in the World of *Harry Potter*.” *Critical Perspectives on Harry Potter*. 2nd edition. Ed. Elizabeth E. Heilman. New York: Routledge, 2009. 163–176.
- “Harry Potter: The final chapter.” Interview by Meredith Vieira. *Dateline NBC* 30 July 2007. NBC News. Web. 22 Aug. 2013.
- “J. K. Rowling Web Chat Transcript.” *The Leaky Cauldron*. 30 July 2007. Web. 10 Jan. 2012.
- Morgan, Rod, and Alison Liebling. “Imprisonment: an expanding scene.” *The Oxford Handbook of Criminology*. 4th edition. Ed. Mike Maguire, Rod Morgan and Robert

- Reiner. Oxford: OUP, 2007. 1110–1138. *Oxford University Press Online Resource Centres*. Oxford University Press. Web. 23 Sep. 2012.
- Morris, Nigel. “Blair’s ‘frenzied law making’: a new offence for every day spent in office.” *The Independent* 16 Aug. 2006. Web. 14 Jan. 2013.
- Newburn, Tim, and Robert Reiner. “Crime and penal policy.” *Blair’s Britain, 1997–2007*. Ed. Anthony Seldon. Cambridge: CUP, 2007. 318–340.
- “The Noble and Most Ancient House of Black.” *The Harry Potter Lexicon*. 8 Oct. 2007. Web. 18 March 2013.
- Rangwala, Shama. “A Marxist Inquiry into J. K. Rowling’s Harry Potter Series.” *Reading Harry Potter Again: New Critical Essays*. Ed. Giselle Liza Anatol. Santa Barbara: Praeger, 2009. 127–142.
- Roberts, Ken. *Class in Contemporary Britain*. 2nd edition. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2011.
- Rowling, J. K. *The Casual Vacancy*. London: Little, Brown, 2012.
- . *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. 1998. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Deathly Hallows*. 2007. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*. 2000. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. 2005. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. 2003. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Philosopher’s Stone*. 1997. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. 1999. London: Bloomsbury, 2010.
- 坂田薫子 「ハリー・ポッターのイギリス(1)——『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における人種問題」(『英米文学研究(日本女子大学)』第49号、2014年、125～142頁)
- Stewart, Kitty. “Equality and social justice.” *Blair’s Britain, 1997–2007*. Ed. Anthony Seldon. Cambridge: CUP, 2007. 408–435.
- 山口二郎 『ブレイク時代のイギリス』(岩波書店、2005年)